

核戦争を許さない

藤巻晴行

中距離核戦力全廃条約の失効や新戦略兵器削減条約の履行停止、北朝鮮によるミサイル開発、英国の核弾頭保有上限の引き上げ、中国の大陸間弾道弾サイロ建設など、冷戦終結以降の核軍縮の流れが逆転し、さらに相次ぐプーチン政権幹部による核使用威嚇発言、ベラルーシへの戦術核配備など、核兵器が実際に使われてしまう危険が高まっている。

桁違いに甚大な核兵器による直接的な被害に加え、大量に発生する煤が成層圏に到達し、そこに数年間留まって太陽光を遮ることによる「核の冬」により一層甚大化すると40年前から警告されているが、数十億人が餓死するリスクの大きさに比して十分な研究が進められ、現時点での予測に応じた備えがなされているとは言い難い。核兵器禁止・廃絶を目指す運動と外交圧力を一層強める必要があることは論を待たないが、核保有国に核軍拡をやめさせ、核兵器を削減させる見通しが立たない以上、被害予測に基づいた適応策すなわち核戦争になった場合への備えを真剣に進めるべきであろう。

そこで本特集では、核の冬を含む核戦争のリスクを再評価して核兵器廃絶の運動に寄与するとともに、核戦争にいかにも備えるべきかを検討する一助とするため、寄稿頂いた。

冨塚「ロシアの核兵器とその近代化の現段階」は、核軍拡競争のエスカレーションを示す。館野「世界の核兵器・核ドクトリン」は、各国の核兵器の配備状況を概説するとともに、米露ともに先制使用を放棄していないことを

示し、全面核戦争を避けるため戦術核による報復が行われる可能性が低いがゆえに、ロシアによる戦術核使用のハードルが下り、さらにひとたび使われると、戦況が不利になると戦術核で打開を図ることが繰り返されかねないと警告している。

海保「核戦争が起こす大量絶滅」は、全面核戦争による核の冬が過去5億年の5大量絶滅に準ずる規模の動物種の絶滅を引き起こすと予測している。飯泉「地域的な核戦争により危惧される世界の食料生産影響」は、気候モデルと作物生産モデルを用いた最近の核の冬の影響予測の研究を紹介している。全面核戦争では3億6千万人の被爆死に対し、53億人の餓死が予測されている。

全面核戦争になれば、核保有国やその同盟国は甚大な直接的被害を受けるものの、過半数の人々は被爆死を免れる。それでも、食料備蓄がなければ、酷寒の中、残り少ない食料を奪い合うことになりかねない。

核兵器廃絶運動と核戦争への備えを進めることは矛盾せず、むしろ命を守る点で一貫している。鈴木「軍拡ではなく農拡こそが命を守る」は、核戦争がなくとも食糧危機は現実的な脅威で、食糧自給率を高めることこそ喫緊の課題であるとする。全面核戦争の発生確率は低いかもしれないが、死者数については地球温暖化と比べても桁違いに大きいことから、被害予測と適応策について、地球温暖化と同程度の予算を割いて研究と備えを進めるべきであろう。

(ふじまき・はるゆき:鳥取大学,農業水文学)